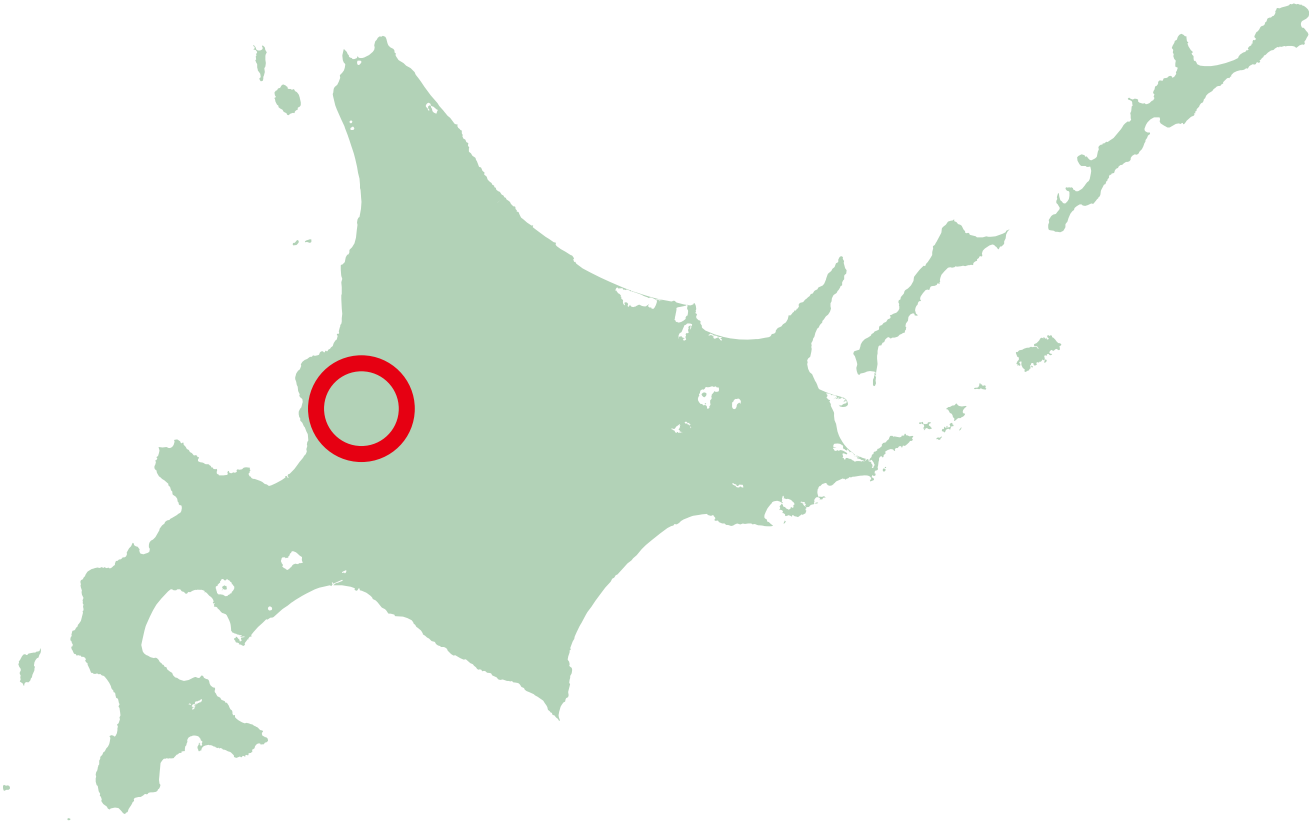
あなたにぴったりの湿地は

雨竜沼湿原（うりゅうぬま）



こんなところ ↓

雨竜沼湿原

佐々木 純一（雨竜沼湿原を愛する会）

子どもたちも頑張って歩く
初夏の湿原散策

湿原の風に吹かれて、日本海の海風は暑寒の峰を越えて湿原に清涼な風をもたらす。風に吹かれて散策しよう、天上の花園を。

雨竜沼湿原は面積 101.5 ha で、北海道の山地湿原で最も大きな高層湿原である。湿原には池塘と呼ばれる池沼やその複合体、浅い水湿地が連続するケルミーシュレンケ複合体*1 やミズゴケ群落が広く展開する高層湿原、中央部を蛇行しながら貫流するペンケペタン川と支流など、山地の高層湿原の微地形がよく発達している。

池塘の水生植物でスイレン科コウホネ属は固有品種ウリュウコウホネ（→p.48）やネムロコウホネとオゼコウホネの 3 種が生育、ガマ科ミクリ属はウキミクリ、ホソバウキミクリ、タマミクリの 3 種が生育、この両科の希少種が複数種で生育するのは全国で雨竜沼湿原だけである。またエゾベニヒツジグサや池塘の縁でカラフトカサスゲの北海道固有種、真夏の涼となるカキツバタなどが池塘を飾る。

空を映す碧い水面にエゾベニヒツジグサ

沼畔にカキツバタが、水面でウリュウコウホネが咲く
「カキツバタの沼」

木道沿いでエゾカンゾウ（ゼンテイカ）と
ヒオウギアヤメがお出迎え

湿原の目覚め、雪渓が融ける６月の遅い春

6 月の雪解けの水中で咲くミズバショウからシナノキンバイ、コバイケイソウ、ミツガシワ、エゾノシモツケソウ、エゾクガイソウなどの河岸や流水縁の植物たち、ミズゴケと一緒にモウセンゴケ、ツルコケモモ、ヒメシャクナゲ、ホロムイイチゴ（→p.54）やトキソウなどの高層植生の植物たち、エゾカンゾウ（ゼンテイカ）、タチギボウシ、ヒオウギアヤメ、ワタスゲ、チングルマ、サワギキョウ、エゾリンドウなどの湿性草原の植物たちと、種多様性が最も高い湿原である。

オオルリボシヤンマやエゾイトトンボたちは池塘の水面をお尻でたたき、ヒオウギアヤメやエゾリンドウの花弁の中に潜り込むエゾオオマルハナバチたち、オオバセンキュウの大きな花傘は昆虫博物館のように多種が集まり、代を繋いでいる。

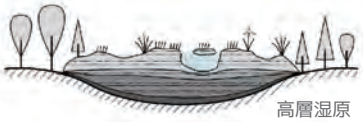
そして晩秋、湿原で生育する 150 種の植物が自分の枯れ色で織りなす草紅葉は、みんなが一つになって晴れると陽光に輝き、曇ると荒涼とした湿原のフィナーレを飾り、白い冬が訪れ眠りに就く。

夏のスゲ類は目立たないけど、
晩秋はみんなが主役の草紅葉

雨竜沼湿原は 2005 年にラムサール条約湿地に登録された。日本海豪雪地帯の標高 850 m の湿原は、冬季間の積雪深は 6 m 以上で 11 ～翌 6 月まで雪に閉ざされる。この雪解け水が湿原を涵養*2 して、生物多様性の維持に重要な動植物を支えている。そして湿原と森林で浄化され天然の栄養を溶かし込んだ清流の尾白利加川は、水稲を育む農業用水となり美味しい雨竜米「ゆめぴりか」や「ななつぼし」が実る。飲料水も湿原山系の自然水で、湿原からの恵み（生態系サービス）は湿原散策のみならず、雨竜町民の生活と生命の水を担っている。

山地湿原なので誰しもが楽しめるバリアフリーではなく、標高差 300 m の登山道をゆっくり 2 時間歩いたその先に湿原がある。全国 52 箇所のラムサール条約湿地で最難関の湿原だが、湿原には約 4 km の周回木道が敷設され、ゆっくりと湿原の魅力と不思議を間近で観察できる。他の湿原では類を見ない、氷期の名残りといわれる円形池塘が多く、流れる川はなぜこんなに蛇行するか、隣り合う池塘でなぜ水位が異なり年中一定なのかなど、木道を歩き植物たちと語らいながら、雨竜沼湿原の風に吹かれて散策するのが至高だ。

*1 泥炭が堆積した湿原でにできた、小さな盛り上がり（ケルミ）と
へこみ（シュレンケ）の連なり。
*2 水分を供給すること。



高層湿原